

表11 現在または最近行ったボランティア活動(性別)

	男性(n=41)		女性(n=47)		p値
	人	%	人	%	
美化・環境整備の活動	11	26.8	14	29.8	0.816
清掃に関する活動	8	19.5	6	12.8	0.560
施設補修等の作業活動	1	2.4	0	0.0	0.466
農作業に関する活動	12	29.3	17	36.2	0.507
町内会・自治会活動	2	4.9	3	6.4	1.000
施設管理・案内・監視等の活動	2	4.9	0	0.0	0.214
子育て支援等に関する活動	1	2.4	1	2.1	1.000
高齢者福祉に関する活動	0	0.0	1	2.1	1.000
遊びなど子どもに関する活動	1	2.4	2	4.3	1.000
運動・音楽・踊り等の指導	0	0.0	2	4.3	0.497
その他の活動	0	0.0	0	0.0	—
特になし	17	41.5	24	51.1	0.399
正確確率検定					

表12 今後新たに行ってみたいこと(性別)

	男性(n=45)		女性(n=51)		p値
	人	%	人	%	
収入の伴う仕事	4	8.9	3	5.9	0.702
シルバー人材センター等の仕事	3	6.7	1	2.0	0.338
家の家事*1	6	13.3	12	23.5	0.295
家の中の家事以外のこと*2	8	17.8	9	17.6	1.000
家族の世話・育成*3	8	17.8	4	7.8	0.216
家の家事以外の作業*4	20	44.4	14	27.5	0.092
地区組織活動*5	9	20.0	4	7.8	0.133
地域の美化・環境整備・清掃活動	7	15.6	6	11.8	0.766
子供に関するボランティア活動*6	6	13.3	4	7.8	0.508
高齢者・障害者福祉に関する活動*7	1	2.2	1	2.0	1.000
趣味の活動*8	6	13.3	10	19.6	0.584
その他	0	0.0	0	0.0	—
特になし	17	37.8	21	41.2	0.835

\*1 例示内容: 食事の支度, 掃除, 洗濯, ごみ捨て

\*2 例示内容: 留守番・電話番, 仏壇の管理, 財産管理

\*3 例示内容: 孫の世話・保育, 子ども世代への助言・育成

\*4 例示内容: 庭の手入れ, 野菜作りなどの農作業, ペット・家畜の世話

\*5 例示内容: 自治会, 老人会, 趣味の会・サークル, 地域の組織会などの活動

\*6 例示内容: 子育て支援, 遊びの指導, 登下校の見守り

\*7 例示内容: 施設慰問, 送迎, 話し相手

\*8 例示内容: 運動, 歌, 楽器の演奏, 踊り, もの作りなど

\*9 正確確率検定

表13 収入の伴う仕事(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満		75歳以上		p値	75歳未満		75歳以上		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
仕事										
持っている	11	35.5	3	11.5	0.062	10	26.3	3	8.8	0.070
持っていない	20	64.5	23	88.5		28	73.7	31	91.2	
職種										
自営業(農林水産関係)	5	45.5	0	0.0	—	3	33.3	2	66.7	—
自営業(農林水産関係以外)	2	18.2	3	100.0		2	22.2	0	0.0	
会社員・公務員	1	9.1	0	0.0		0	0.0	0	0.0	
アルバイト・パート	1	9.1	0	0.0		2	22.2	0	0.0	
その他	2	18.2	0	0.0		2	22.2	1	33.3	

正確確率検定

表14 シルバー人材センター・高齢者事業団の認知度と仕事の経験(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満		75歳以上		p値	75歳未満		75歳以上		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
認知度										
全く知らない	2	6.5	3	10.7	0.152	1	2.6	6	18.8	0.094
聞いたことはある	11	35.5	3	10.7		15	39.5	12	37.5	
だいたい知っている	10	32.3	14	50.0		19	50.0	10	31.3	
よく知っている	8	25.8	8	28.6		3	7.9	4	12.5	
最近3ヶ月間の仕事の経験										
行った	1	3.6	1	4.0	1.000	0	0.0	1	3.3	0.493
行っていない	26	92.9	23	92.0		34	94.4	26	86.7	
わからない	1	3.6	1	4.0		2	5.6	3	10.0	

正確確率検定

表15 家の中で行っている役割(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満 (n=48)		75歳以上 (n=66)		p値	75歳未満 (n=48)		75歳以上 (n=66)		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
食事の支度	6	19.4	3	11.1	0.481	33	84.6	22	56.4	0.012
洗濯	5	16.1	4	14.8	1.000	36	92.3	24	61.5	0.002
掃除	10	32.3	9	33.3	1.000	33	84.6	24	61.5	0.040
家計や財産管理	7	22.6	2	7.4	0.154	11	28.2	5	12.8	0.160
孫の世話や保育	4	12.9	1	3.7	0.359	9	23.1	5	12.8	0.377
親や配偶者の介護	1	3.2	0	0.0	1.000	3	7.7	1	2.6	0.615
ペット・家畜の世話	5	16.1	4	14.8	1.000	8	20.5	5	12.8	0.545
神棚・仏壇の管理	13	41.9	10	37.0	0.791	23	59.0	23	59.0	1.000
庭・花壇・菜園の管理	20	64.5	9	33.3	0.034	27	69.2	20	51.3	0.165
ごみ捨て・ごみ処理	10	32.3	7	25.9	0.773	27	69.2	20	51.3	0.165
留守番・電話番	11	35.5	7	25.9	0.571	28	71.8	22	56.4	0.238
家業の手伝い	16	51.6	5	18.5	0.013	19	48.7	12	30.8	0.165
大工仕事や家の修繕	3	9.7	1	3.7	0.615	0	0.0	0	0.0	—
漬物・乾物・味噌作り等	0	0.0	3	11.0	0.095	27	69.2	14	35.9	0.006
その他	1	3.2	2	7.4	0.593	0	0.0	3	7.7	0.240
特になし	2	6.5	7	25.9	0.068	1	2.6	4	10.3	0.358

正確確率検定

表16 入っている地域の団体・組織・会(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満		75歳以上		p値	75歳未満		75歳以上		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
町内会・自治会	8	34.8	4	21.1	0.495	10	37.0	3	18.8	0.307
老人会・高齢者団体	12	48.0	10	45.5	1.000	11	35.5	12	52.2	0.272
婦人会・女性団体	1	5.3	2	13.3	0.571	4	14.8	0	0.0	0.280
民生委員・福祉関係団体・組織	1	5.0	1	6.3	1.000	0	0.0	2	13.3	0.135
保健等の推進組織	1	5.0	1	5.0	1.000	0	0.0	1	6.7	0.375
体育・スポーツ関係指導者団体	2	10.0	2	13.3	1.000	3	12.0	1	6.7	1.000
趣味・レクリエーション関係の会・サークル	7	31.8	3	20.0	0.481	8	28.6	1	6.7	0.129
地域の祭りや文化に関わる組織	7	36.8	3	18.8	0.285	4	16.0	1	6.7	0.633
農協・漁協・森林組合	8	36.4	4	22.2	0.491	2	8.0	1	6.7	1.000
商工会・法人会等の商工団体	3	15.0	1	6.7	0.619	0	0.0	0	0.0	—
宗教関連団体・寺の檀家組織	9	42.9	4	26.7	0.484	1	4.2	3	20.0	0.279
政治関連団体・後援会	3	15.8	1	6.3	0.608	1	4.2	0	0.0	1.000
戦友会・遺族会	1	5.3	3	21.4	0.288	2	8.0	1	7.1	1.000
退職者団体・会	3	15.8	3	20.0	1.000	1	4.2	1	6.7	1.000
ボランティア関係団体・会	2	10.5	1	6.7	1.000	4	16.7	0	0.0	0.146
その他の団体	2	10.5	1	6.7	1.000	1	4.2	0	0.0	1.000
正確確率検定										

表17 現在または最近行ったボランティア活動(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満 (n=23)		75歳以上 (n=18)		p値	75歳未満 (n=22)		75歳以上 (n=25)		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
美化・環境整備の活動	8	34.8	3	16.7	0.291	8	36.4	6	24.0	0.524
清掃に関する活動	5	21.7	3	16.7	1.000	4	18.2	2	8.0	0.398
施設補修等の作業活動	1	4.3	0	0.0	1.000	0	0.0	0	0.0	—
農作業に関する活動	10	43.5	2	11.1	0.038	8	36.4	9	36.0	1.000
町内会・自治会活動	1	4.3	1	5.6	1.000	3	13.6	0	0.0	0.095
施設管理・案内・監視等の活動	1	4.3	1	5.6	1.000	0	0.0	0	0.0	—
子育て支援等に関する活動	1	4.3	0	0.0	1.000	1	4.5	0	0.0	0.468
高齢者福祉に関する活動	0	0.0	0	0.0	—	1	4.5	0	0.0	0.468
遊びなど子どもに関する活動	0	0.0	1	5.6	0.439	2	9.1	0	0.0	0.214
運動・音楽・踊り等の指導	0	0.0	0	0.0	—	2	9.1	0	0.0	0.214
その他の活動	0	0.0	0	0.0	—	0	0.0	0	0.0	—
特になし	7	30.4	10	55.6	0.125	10	45.5	14	56.0	0.564
正確確率検定										

表18 今後新たに行ってみたいこと(性・年齢別)

	男性					女性				
	75歳未満 (n=26)		75歳以上 (n=19)		p値	75歳未満 (n=28)		75歳以上 (n=23)		p値
	人	%	人	%		人	%	人	%	
収入の伴う仕事	4	15.4	0	0.0	0.126	3	10.7	0	0.0	0.242
シルバー人材センター等の仕事	3	11.5	0	0.0	0.252	1	3.6	0	0.0	1.000
家の家事*1	3	11.5	3	15.8	0.686	8	28.6	4	17.4	0.509
家の中の家事以外のこと*2	6	23.1	2	10.5	0.435	4	14.3	5	21.7	0.714
家族の世話・育成*3	7	26.9	1	5.3	0.113	3	10.7	1	4.3	0.617
家の家事以外の作業*4	13	50.0	7	36.8	0.545	7	25.0	7	30.4	0.757
地区組織活動*5	6	23.1	3	15.8	0.712	1	3.6	3	13.0	0.316
地域の美化・環境整備・清掃活動	6	23.1	1	5.3	0.211	3	10.7	3	13.0	1.000
子供に関するボランティア活動*6	6	23.1	0	0.0	0.032	2	7.1	2	8.7	1.000
高齢者・障害者福祉に関する活動*7	0	0.0	1	5.3	0.422	1	3.6	0	0.0	1.000
趣味の活動*8	5	19.2	1	5.3	0.222	6	21.4	4	17.4	1.000
その他	0	0.0	0	0.0	—	0	0.0	0	0.0	—
特になし	8	30.8	9	47.4	0.353	10	35.7	11	47.8	0.408

\*1 例示内容: 食事の支度, 掃除, 洗濯, ごみ捨て

\*2 例示内容: 留守番・電話番, 仏壇の管理, 財産管理

\*3 例示内容: 孫の世話・保育, 子ども世代への助言・育成

\*4 例示内容: 庭の手入れ, 野菜作りなどの農作業, ペット・家畜の世話

\*5 例示内容: 自治会, 老人会, 趣味の会・サークル, 地域の組織会などの活動

\*6 例示内容: 子育て支援, 遊びの指導, 登下校の見守り

\*7 例示内容: 施設慰問, 送迎, 話し相手

\*8 例示内容: 運動, 歌, 楽器の演奏, 踊り, もの作りなど

\*9 正確確率検定

表19 各変数における今後行いたいことの有無の比較

属性	あり		特になし		p値
	人	%	人	%	
世帯構成* <sup>1</sup>					
独居	4	80.0	1	20.0	0.645
その他	52	58.4	37	41.6	
健康度自己評価* <sup>2</sup>					
健康	36	72.0	14	28.0	0.012
健康でない	20	45.5	24	54.5	
生活満足度* <sup>3</sup>					
満足	49	62.8	29	37.2	0.065
不満	4	33.3	8	88.7	
社会との関わり* <sup>4</sup>					
そう思う	34	72.3	13	27.7	0.002
そう思わない	15	38.5	24	61.5	
日常生活自立度					
自立・ランクJ	38	62.3	23	37.7	0.004
ランクA～C	2	15.4	11	84.6	
老研式活動能力指標合計点* <sup>5</sup>					
高	41	69.5	18	30.5	0.003
低	11	35.5	20	64.5	
手段的自立得点					
高	42	71.2	17	28.6	0.001
低	10	32.3	21	67.7	
知的能動性得点					
高	42	65.6	22	34.4	0.033
低	10	38.5	16	61.5	
社会的役割得点					
高	39	66.1	20	33.9	0.043
低	13	41.9	18	58.1	
-----					
役割関連項目					
収入を伴う仕事					
もっている	16	88.9	2	11.1	0.006
もっていない	39	52.7	35	47.3	
シルバー人材センター等の認知度* <sup>6</sup>					
知らない	14	38.9	22	61.1	0.002
知っている	39	72.2	15	27.8	
最近3ヶ月のシルバー人材センター等での仕事の経験					
行った	1	50.0	1	50.0	1.000
行っていない・わからない	49	57.6	36	42.4	
家の中の役割の有無					
あり	55	65.5	29	34.5	0.012
なし	2	20.0	8	80.0	
地域の団体・組織・会との関わりの有無					
あり	40	70.2	17	29.8	0.034
なし	13	44.8	16	55.2	
ボランティア活動の実施の有無					
あり	35	89.7	4	10.3	0.000
なし	11	28.9	27	71.1	

\*1 「夫婦世帯」は「その他」に含む

\*2 「非常に健康」「まあ健康」は「健康」, 「あまり健康でない」「健康でない」は「健康でない」とする

\*3 「満足している」「まあ満足している」は「満足」, 「やや不満である」「不満である」は「不満」とする

\*4 社会との関わりをもって生活したいと思うかを質問し, 「そう思う」「まあそう思う」は「そう思う」, 「あまりそう思わない」「そう思わない」は「そう思わない」とする

\*5 平均点より低いものを「低」, 高いものを「高」とする

\*6 「全く知らない」「聞いたことはある」を「知らない」, 「だいたい知っている」「よく知っている」を「知っている」とする

\*7 正確確率検定

表20 今後行いたいことの有無を従属変数としたロジスティック回帰分析 n=48

	オッズ比	95%信頼区間		p値
		下限	上限	
シルバー人材センター等の認識(知らない/知っている)	0.03	0.003	0.365	0.006
ボランティア活動の有無(なし/あり)	76.22	5.479	1060.229	0.001
社会との関わり(そう思う/そう思わない)	24.14	1.135	513.500	0.041
老研式活動能力指標合計点(低/高)	0.07	0.005	0.099	0.049

多重ロジスティック回帰分析:変数減少法(尤度比)

図表群 9 シルバー人材センター (H17)

表 1 各種施策の実行状況

施策	範囲	平均
就業機会拡大策 (外部への働きかけ)	0-8	4.38
就業機会拡大策 (会員の技術向上)	0-5	1.75
未就業者対策	0-4	2.06
ホワイトカラーの就業開拓策	0-4	1.69
安全就業推進対策	0-6	4.55
健康づくり対策	0-4	1.69
レクリエーション・ボランティア推進対策	0-5	3.81
外部団体との連携推進	0-6	3.50

注)分析例数は 16 である。

表 2 各種施策の実行数とセンターのアウトカム指標との相関係数

施策	粗入会率	会員一人あたり 契約件数	会員一人あたり 契約金額
就業機会拡大策 (外部への働きかけ)	.085	.157	-.182
就業機会拡大策 (会員の技術向上)	-.278	-.244	.126
未就業者対策	-.101	-.132	.347
ホワイトカラーの就業開拓策	.105	-.185	-.239
安全就業推進対策	.488+	.344	.010
健康づくり対策	.446+	.444*	.367
レクリエーション・ボランティア推進対策	.018	.129	-.060
外部団体との連携推進	-.396	-.272	.052

注 1) 分析例数は 16 である。

注 2) 検定は t 検定。+; P<.10, \*; P<.05。

表 3 住民の労働特性・産業基盤とセンターのアウトカム指標との相関係数

施策	粗入会率	会員一人あたり 契約件数	会員一人あたり 契約金額
失業率	.196	-.105	-.175
就業者中の一次産業就業者割合	.482**	.391**	.027
就業者中の二次産業就業者割合	.329*	.049	-.058
就業者中の三次産業就業者割合	-.325*	-.105	.059
会員一人あたりの製造・商業出荷額	-.080	-.288*	-.090
会員一人あたりの事業所数	-.299*	-.379**	-.089
会員一人あたりの 2 次産業事業所数	-.451**	-.489**	-.168
会員一人あたりの 3 次産業事業所数	-.276+	-.359*	-.078

注 1) 分析例数は 49 である。

注 2) 検定は t 検定。\*; P<.05、\*\*;P<.01。

表4 センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度と業種・企業規模との関連

	認知が高い 事業所の割合	利用経験がある 事業所の割合	利用意向がある 事業所の割合	満足度が高い 事業所の割合	n
業種					
建設	45.7	4.9	14.8	100.0	82
製造	54.5	16.3	22.0	86.7	100
電気	38.5	16.7	21.4	100.0	14
運輸・情報	46.7	2.2	26.7	100.0	47
卸・小売・飲食店	46.2	11.0	23.4	66.7	238
金融・保険	65.0	0.0	0.0	-	21
不動産	22.2	0.0	22.2	-	9
サービス	52.3	10.7	23.8	88.0	245
その他	57.4	14.3	22.2	100.0	66
常用労働者数					
5～29人	47.0	7.7**	19.8*	72.7*	472
30～299人	54.5	16.6	29.5	90.6	202
300人以上	54.5	9.7	18.9	100.0	116

注1) 分析に使用する変数に欠測のあるケースは除いている。nについては、評価指標に欠測を含むケースも含まれている。満足度については、センターを利用した経験のある事業所に限定。

注2) 検定は $\chi^2$ 検定。\*; P<.05、\*\*;P<.01。

表5 センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度と高年齢就業者に対する施策実施との関連

	認知が高い 事業所の割合	利用経験がある 事業所の割合	利用意向がある 事業所の割合	満足度が高い 事業所の割合	n
就業体制・環境の整備					
あり	53.6	14.3*	30.0**	76.5	243
なし	48.3	8.2	16.6	89.2	506
雇用の延長策					
あり	57.4**	14.0*	26.2*	92.3	197
なし	46.2	8.4	18.7	78.0	530

注1) 分析に使用する変数に欠測のあるケースは除いている。nについては、評価指標に欠測を含むケースも含まれている。満足度については、センターを利用した経験のある事業所に限定。

注2) 検定は $\chi^2$ 検定。\*; P<.05、\*\*;P<.01。

表6 センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度と高年齢就業者に対する認識との関連

	認知が高い 事業所の割合	利用経験がある 事業所の割合	利用意向がある 事業所の割合	満足度が高い 事業所の割合	n
効率性					
第一 3 分位 (低い)	48.7	10.6	21.6	71.4	229
第二 3 分位	47.6	9.7	21.9	85.7	230
第三 3 分位 (高い)	51.9	11.1	22.5	91.2	318
勤勉性					
第一 3 分位 (低い)	47.1	9.2	17.2**	89.3	330
第二 3 分位	48.9	9.3	19.3	87.5	271
第三 3 分位 (高い)	56.4	14.9	35.9	76.0	174
協調性					
第一 3 分位 (低い)	57.0	10.9	18.0**	60.0	101
第二 3 分位	47.9	9.2	19.4	89.7	442
第三 3 分位 (高い)	50.0	12.9	29.7	85.2	227

注 1) 分析に使用する変数に欠測のあるケースは除いている。n については、評価指標に欠測を含むケースも含まれている。満足度については、センターを利用した経験のある事業所に限定。

注 2) 検定は  $\chi^2$  検定。\*; P<.05、\*\*;P<.01。

表7 センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度と経営状況・収益改善方法との関連

		認知が高い 事業所の割合	利用経験がある 事業所の割合	利用意向がある 事業所の割合	満足度が高い 事業所の割合	n
営業利益 (5年間)						
増加		53.1	13.5	28.0	90.5	164
変化なし		49.3	10.8	21.6	86.7	292
減少		48.2	7.4	18.8	76.2	311
収益を上げる方法						
調達先の見直し	必要	48.0	13.5	29.1*	72.7	180
	不必要	51.8	11.0	21.4	86.5	503
人件費の圧縮	必要	50.9	11.5	23.9	81.4	403
	不必要	50.7	11.8	22.7	83.9	280
物流コストの削減	必要	51.4	13.0	21.9	80.0	180
	不必要	50.6	11.2	24.0	83.3	503
作業工程の見直し	必要	49.6	15.0*	26.3	86.8	263
	不必要	51.6	9.6	21.5	77.8	420
外部委託	必要	61.1*	13.5	26.1	69.2	113
	不必要	48.8	11.3	22.9	85.2	570

注 1) 分析に使用する変数に欠測のあるケースは除いている。n については、評価指標に欠測を含むケースも含まれている。満足度については、センターを利用した経験のある事業所に限定。

注 2) 検定は  $\chi^2$  検定。\*; P<.05、\*\*;P<.01。



資料  
(学会発表抄録)

○齊藤 恭平<sup>1)</sup>、佐藤 美由紀<sup>2)</sup>、藤田 喜枝子<sup>2)</sup>、伊藤 弓月<sup>3)</sup>、芳賀 博<sup>3)</sup>

函館短期大学 食物栄養学科<sup>1)</sup>、北海道今金町保健福祉課<sup>2)</sup>、東北文化学園大学<sup>3)</sup>

【目的】高齢者の社会参加や社会活動と健康度に関する研究は数多く行われており、積極的な社会参加や社会活動が生命予後に好影響をもたらすことや、生活機能の維持、QOLの向上と密接に関連することが明らかになっている。本研究では社会参加や社会活動に、家事や趣味、ボランティア、リーダー等も含め、役割という概念を設定し、それら役割の実態や健康との関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】北海道今金町在住の非介護認定在宅高齢者916名を対象とし、配票留め置きによるアンケート調査を実施した。調査期間は平成17年1月上旬の2週間である。役割項目として、1) 職業労働、2) 家事労働、3) 学習・趣味活動、4) ボランティア活動、5) 地域団体・組織活動、6) リーダーシップを設定した。健康度に関する指標として、1) ADL自己効力感(日常生活動作に関する自己効力感指標)、2) 活動能力(老研式活動能力指標)、3) QOL(地域高齢者のためのQOL質問表)、4) 精神的健康度(GDS日本語版)、5) 入院数(過去1年間の入院経験)、6) 通院数(過去1ヵ月間の通院日数)を設定した。

【結果・考察】回収数は858(93.7%)、男性388(45.2%)、女性(54.8%)、平均年齢は74.6±6.4歳であった。実施している役割で最も多かったのは家事労働であり、中でも「食事の支度」「洗濯」「掃除」「神棚や仏壇の管理」「ごみ捨て・ごみ処理」などは半数以上が実施していた。また加齢に伴い全体的に役割数が低下する傾向が見られたが、高齢であっても、身体機能が低下していても、「食事の支度」「洗濯」「掃除」「留守番」などの家事労働や、「公園整備」「花壇の手入れ」などのボランティア活動は実施されている役割であった。加齢に伴う身体機能の低下は本人の健康度低下の直接的な原因と考えられるが、そこにはそれに伴う役割数の減少などの要因が複雑に関連しているものと思われる。役割と関連がある健康指標は自己効力感、活動能力、QOL、精神的健康度であり、とくに職業労働や学習・趣味活動、地域団体・組織活動と有意に関連を示した。希望の多かった役割として、職業労働では「農作業」、家事労働では「食事の支度」、学習・趣味活動では「パークゴルフ」、ボランティア活動では「地域美化・環境整備」であった。

【今後】本研究の結果を反映し、今後本町内の数ヶ所の自治会で役割創造のためのワークショップを開催する予定である。具体的な役割のセッティングによる健康度への影響把握を今後の課題とした。

○高橋 和子<sup>1)</sup>、安村 誠司<sup>2)</sup>、矢部 順子<sup>3)</sup>、芳賀 博<sup>4)</sup>

宮城大学 看護学部<sup>1)</sup>、福島県立医科大学<sup>2)</sup>、須賀川市<sup>3)</sup>、東北文化学園大学<sup>4)</sup>

【目的】高齢者の健康および生きがいづくりにおいて、積極的な社会活動への参加が促進されるよう、高齢者の担える役割の発掘と創造は極めて重要である。そのため、高齢者の役割の発掘・創造における基礎的資料を得ることを目的に、地域で暮らす高齢者が現在どのような役割を担っているのかの実態について把握し、性・年齢別による検討を行った。

【対象と方法】対象は、福島県S市A地区の65歳以上の高齢者1,446人中、1/2の723人を無作為に抽出した。そのうち、施設入所者、死亡者、転出者を除く693人を分析対象とした。分析はFisherの直接確率法を用い、性別の比較を行った。さらに、男女別に前期高齢者(65-74歳)・後期高齢者(75歳以上)に分け、年齢別の比較を行った。

【結果】分析の結果、収入の伴う職業は、女性よりも男性が有している割合が高かった。年齢間の比較では、男女とも後期高齢者より前期高齢者の方が有職者の割合が高かった。家の中での役割は、男性は女性よりも大工仕事のような力仕事を、女性は男性よりも洗濯・食事の支度などの家事全般を担っている割合が有意に高かった。しかし、女性の年齢間の比較では、家事の実施割合は前期高齢者よりも後期高齢者で低く、後期高齢者になると女性は、家の中での役割が全般的に減少する傾向が伺われた。また、地域の団体・組織・会との関わりは、男女とも「町内会・自治会」、「老人会・高齢者団体」に入っている割合が他の団体・組織等よりも高かった。現在行っている(または、最近行った)ボランティア活動は、男女とも「美化・環境整備の活動」、「農作業に関する活動」、「清掃に関する活動」の割合が高かったが、全体的に男性は地域活動を中心に、女性は家の中を中心に活動している傾向が認められた。

【まとめ】対象となった高齢者は、性別、年齢別に実際に担っている役割、活動している場が異なることが明らかになった。今後、高齢者が担うことが可能な役割を創造し、社会活動の範囲を拡大していくためには、性・年齢などの特性の考慮、高齢者にとって楽しみとなる活動、実施可能な環境整備を検討していくことが課題であると示唆された。(本研究は、平成16年厚生労働省科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業(主任研究者芳賀 博)の一環として実施された。)

- 丸山孝一<sup>1</sup>、兪今<sup>2</sup>、柴田博<sup>3</sup>、新野直明<sup>3</sup>、芳賀博<sup>4</sup>  
 1 桜美林大学大学院老年学専攻 2 桜美林大学加齢発達研究所  
 3 桜美林大学大学院 4 東北文化学園大学医療福祉学部

### 【目的】

日本の高齢化率は2004年10月時点で19.5%に達し、世界でも類を見ない高齢社会を迎えている。さらに約10年後の2015年には団塊の世代が65歳以上になるに伴い、約4人に1人が65歳以上の高齢者となる。2004年で2,483万人、2015年には3,277万人を数える高齢者が、終生“人間らしい”生活を営んでいく上において身体面・精神面での能力維持は重要な課題となる。

“人間らしい”生活を営むのに必要な身体的側面からみた能力に関しては、老研式活動能力指標などの利用により測定評価する研究は進んでいるが、精神的側面からみた能力に関しては、その測定尺度の開発が進んでいなかった。

ここにきて鈴木・崎原<sup>1)</sup>の研究により精神的自立に関する尺度、特に中高年者・高齢者に使用可能な尺度を目指しその開発が行われた。しかし、同尺度開発時の調査対象が18歳から69歳ということで、必ずしも高齢者全般が対象になっていなかったことから、本研究では同尺度を用いて65歳以上の高齢者を対象にした調査を実施し、同尺度の有用性を明らかにすることを目的とし、その信頼性・妥当性を検討した。

### 【方法】

平成16年10月1日現在の住民基本台帳をもとに、平成17年1月群馬県A村の西部地区に住む65歳以上の高齢者1,472名を対象に、自記式調査表を郵送により配布（留置法）し、調査員が各戸を訪問して回収した。1,203名（81.7%）より回答を得たが、本研究では精神的自立性尺度の8項目の質問のいずれかに無回答であった者を除く1,125人（男性504人（44.8%）、女性621人（55.2%）・平均年齢74.6±6.9歳）を分析対象者とした。

調査にあたり、倫理面においては十分な配慮を行ったのち実施した。調査表の結果は集団的に処理した。

分析方法は、カテゴリーの差の検定には $\chi^2$ 検定、2群間の平均の比較にはt検定、多群間の平均の比較には1要因の一元配置分析、指標間の関連性にはPearsonの積率相関係数を用いた。精神的自立性尺度の信頼性の確認にあたっては、Cronbachの $\alpha$ 係数（以下、 $\alpha$ 係数）を算出した。また、精神的自立性尺度の全8項目に対し探索的因子分析を行った。モデルの検証にはAmosを用いた共分散構造分析を行った。

### 【結果】

$\alpha$ 係数は0.864であった。また、下位尺度の目的指向性、自己責任性それぞれの $\alpha$ 係数は0.809と0.837であった。

探索的因子分析（Varimax回転）を行った結果、目的指向性と自己責任性を構成する因子が抽出された。それぞれの因子負担量は0.654～0.834、0.747～0.821となった。

18歳から69歳を対象にした知見と同じモデルにて共分散構造分析を行った。この結果、表に示すように $\chi^2/df$ は5.426、適合度指標であるGFI（Goodness of Fit Index）は0.980、AGFI（Adjusted GFI）は0.957、さらにRMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）は0.063となった。

精神的自立性尺度合計得点とGDS短縮版得点との相関係数は-0.437となった。（ $P < 0.001$ ）

### 【考察】

本研究の目的は、鈴木・崎原が作成した精神的自立性尺度の信頼性と因子的妥当性の検討にあった。

$\alpha$ 係数は0.8台後半を示し、本調査は18歳から69歳を対象にした知見と同様の結果で、高い内的整合性が保たれていることが明らかになった。また、下位尺度の目的指向性、自己責任性それぞれの $\alpha$ 係数も0.8台前半を保つことが出来ており、下位尺度それぞれについても高い内的整合性をもつと考えられる。

因子構造は、鈴木・崎原が尺度開発時に設定した、精神的自立性は二次因子であり、一次因子として目的指向性、自己責任性をもつ因子構造、としたものが本研究でも明らかとなった。また調査データを分析した結果、18歳-69歳を対象にした知見と同じく2因子構造をもつという点においては、因子的妥当性をもった尺度であるといえる。

18歳から69歳を対象にした知見と同じモデルで共分散構造分析を行ったところほぼ同一の結果を示した。共分散構造分析のGFIは構成したモデルが標本共分散行列を説明する割合を示す指標であり、適合度としては0.9を下回った場合は、モデルとして採択しない方が望ましいとされるが、これらの数値は0.9を上回っている。さらにRMSEAはモデルの複雑さによる見かけ上の適合度の上昇を調整する指標であり、0.08以下であれば適合度が高いとされるが、この数値は0.08を下回っており、適合度はともに満足できる結果となっている。

また、抑うつ症状が弱いほど精神的自立性が高いことが明らかになったことから同尺度の妥当性があると考えられる。

### 【結論】

65歳以上の高齢者においても、精神的自立性尺度の信頼性および妥当性は確認された。これによって65歳以上の高齢者の精神的自立性を客観的に測定する尺度として有用であることが示された。

表 共分散構造分析における解 (標準化係数)

第2次因子負荷量	
第2次因子 (精神的自立性)	
第1次因子 (目的指向性)	0.869
第1次因子 (自己責任性)	0.786
第1次因子負荷量	
第1次因子 (目的指向性)	
質問1. 趣味や楽しみ、好きでやることを持っている	0.653
質問2. これからの人生に目的を持っている	0.777
質問3. 何か夢中になれることがある	0.733
質問4. 何か人のためになることをしたい	0.658
第1次因子 (自己責任性)	
質問5. 人から指図されるよりは自分で判断して行動する方だ	0.753
質問6. 状況や他人の意見に流されない方だ	0.624
質問7. 自分の意見や行動には責任を持っている	0.877
質問8. 自分の考えに自信を持っている	0.780
モデルの適合度	
$X^2$	92.243
df	17
$X^2/df$	5.426
GFI	0.980
AGFI	0.957
RMSEA	0.063

参考文献：1) 鈴木征男、崎原盛造(2003)：精神的自立性尺度の作成—その構成概念の妥当性と信頼性の検討—，民族衛生, 69(2), 47-56

#### A-14. 地域在住高齢者の抑うつに関連要因 一日常活動能力に着目して一

国立長寿医療センター研究所 疫学研究部<sup>1)</sup>、桜美林大学大学院<sup>2)</sup>

○西田 裕紀子<sup>1)</sup>、新野 直明<sup>2)</sup>、福川 康之<sup>1)</sup>、安藤 富士子<sup>1)</sup>、下方 浩史<sup>1)</sup>

【目的】高齢者の抑うつは精神保健上の重大な問題である。本研究では、地域在住高齢者の抑うつに、日常活動能力や基本属性がどのように関連するのかについて検討する。

【方法】対象 国立長寿医療センター「老化に関する長期縦断疫学研究 (NILS-LSA)」第1次調査 (1997-2000) に参加した60-79歳の地域在住高齢者939名 (男性498名、女性441名)。変数 ①抑うつ (GDS: Geriatric Depression Scale 短縮版) ②日常活動能力: 手段的自立・知的能動性・社会的役割 (老研式活動能力指標) ③基本属性: 性 (男性=0/女性=1)・年齢・教育歴 (小学校・新制中学校=0-大学・大学院=4)・所得 (0-149万円=0-2000万円以上=9)・居住形態 (単身世帯=0/単身世帯以外=1)・主観的健康感 (非常に悪い=0-非常に良い=4) 分析 基本属性が日常活動能力に関連し、日常活動能力の程度が抑うつに影響するという因果モデルを仮定し、抑うつを従属変数、日常活動能力を1次的要因、基本属性を2次的要因とするパス解析を行なった。

【結果】第1段階として、日常活動能力各変数を従属変数、基本属性全変数を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、手段的自立に対して性 ( $\beta = .18, p < .001$ )、主観的健康感 ( $\beta = .09, p < .01$ ) からのパスが有意な正の係数を示した。知的能動性には、教育歴 ( $\beta = .16, p < .001$ )、主観的健康感 ( $\beta = .08, p < .05$ ) が有意な正の係数、性 ( $\beta = -.10, p < .01$ ) が有意な負の係数を示した。一方、社会的役割には、性 ( $\beta = .07, p < .05$ )、主観的健康感 ( $\beta = .09, p < .01$ )、居住形態 ( $\beta = .10, p < .01$ ) が有意な正の係数を示した。さらに第2段階として、抑うつを従属変数、全ての要因を独立変数とする重回帰分析を行った結果、日常活動能力のうち、知的能動性 ( $\beta = -.09, p < .01$ ) と社会的役割 ( $\beta = -.26, p < .001$ )、基本属性の所得 ( $\beta = -.12, p < .001$ ) と主観的健康感 ( $\beta = -.28, p < .001$ )、居住形態 ( $\beta = -.09, p < .01$ ) から抑うつへのパスが有意に負の係数を示した ( $R^2 = .22, p < .001$ )。

【結論】日常活動能力の中で、知的能動性や社会的役割の低下が抑うつを高めること、性・教育歴・居住形態・主観的健康感といった属性は活動能力を介して抑うつに影響することが示唆された。一方、低所得、独居や主観的な健康不良は直接的にも抑うつ増大に影響することが示された。

## 第47回日本老年社会科学大会 報告要旨作成フォーマット

- ・ あらかじめ入力スタイルが設定されておりますので、指定の場所に演題名（副題）、発表者氏名、本文（図表等を含む）を入力してください。
- ・ 文字のサイズ、ページ設定等の変更は、決してしないようにお願いします。
- ・ 本文部分（図表等を含む）の仕上がりは、22字×30行×2段、段間2字です。
- ・ 図表等につきましては、レイアウト枠を挿入してそのなかにお入れください。囲みの外側（左右幅160ミリ以上）にはみ出さないようにご注意ください。

### 1. 報告名（報告名と副題の間は「;」で区切ってください）

高齢者の社会参加に関連する要因の包括的検討

### 2. 発表者氏名（共同研究者の入力は不要です）

愈 今

\*注意\* 四角囲みの中（セクション区切りと書かれた次の行）に本文を入力してください。

#### 【目的】

高齢化社会における高齢者の社会活動参加は健康で活力のある社会の実現、高齢者のQOL増進にその重要性が定着しつつあり、行政においても多様な支援事業が行われている。しかしながら、高齢者のニーズ、行政の支援システムにおける課題がまだ多く残っている。本研究は社会参加に関連する要因を包括的にとらえ、施策の推進・改善に有益な資料を得ることを目的とし、検討を行った。

#### 【方法】

協力者は東京都A区のシルバー人材センターおよび老人クラブ代表を介し、60歳以上の3,357人に、自記式調査票を用いて、2002年12月～2003年2月に郵送法および指定場所での回収を行った。その結果有効回答を得られた1912人を本研究の分析対象とした。内枠は男性1251人、65.8%、女性651人で34.2%、平均年齢は70.0±5.5歳であった。調査内容は、社会活動に関する項目および健康度、生活の質（QOL質問表）、孤独感（AOK）、幸福感、生活満足感などであった。社会活動に関する項目は33項目活動を4つの社会活動領域別（個人活動12項目、地域活動7項目、学習活動4項目、団体活動11項目）の実施数を算出し検討を行った。その他妨害要因、促進要因などについても回答を求めた。

#### 【結果】

個人活動、地域活動の実施数は女性が男性より高く（ $P<.001$ ）、学習活動実施数は後期高齢者が前期高齢者より高かった（ $P<.01$ ）。社会活動と促進要因をみると「個人の意思」および「友人、仲間の進め」で社会活動に参加している者、また、「地

域に貢献したい」という要望のある者で各種社会活動参加が有意に高かった（ $P<.01\sim P<.001$ ）。社会活動と妨害要因をみると「誘ってくれる友人がいない」者で共通して各種社会活動参加が低かった（ $P<.001$ ）。身体的疾患などの個人的側面の要因がある者で個人活動が低く、「興味に合う活動がない」「意欲がない」「自分にあった活動がない」者で地域活動が低い結果であった（ $P<.05\sim P<.001$ ）。重回帰モデルによる社会活動と健康度、QOL、幸福感、孤独感などの各指標間の関連についてはみると、個人活動、地域活動、学習活動、団体活動と各指標間関連性は違いが見られるものの、幸福感、QOLの精神的活力および孤独感とは共通して関連性が認められた（ $P<.05\sim P<.001$ ）。

#### 【考察・まとめ】

社会活動参加と身体的、精神的健康度の関わりを持つことは先行研究でほぼ一致している知見であり、本研究でも類似した結果が得られた。また、社会活動の領域別のそれぞれ活動と関わる要因をみても社会活動と幸福感、精神的活力、孤独感の関わりは共通して明らかであり、心理社会的側面、生活の質の向上にも社会活動の重要性が示唆された。本研究の結果より高齢者の社会活動参加を促進するには、身体的、精神的健康の維持、促進するとともに仲間作りの重要性や社会参加への意識、意欲を高めることが重要であり、積極的なきっかけ作りや、ニーズに合う取り組みが望ましいことが示唆された。特に介入可能な部分においては社会活動参加の支援システムを充実していくことが望ましいと考えられる。

## Ⅱ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年

研究成果の刊行に該当する書籍および雑誌は特になし



平成 17 年度厚生労働科学研究研究費補助金（長寿科学総合研究事業）

高齢者の役割の創造による社会活動の推進及び

QOL の向上に関する総合的研究

(H16-長寿-028)

平成 16-17 年度 総合研究報告書（平成 18 年 3 月）

発行責任者  
発行

主任研究者 芳賀 博  
仙台市青葉区国見 6-45-1  
東北文化学園大学医療福祉学部  
電話 022-233-3310  
FAX 022-233-3310